

# 今川了俊——遠州が誇る郷土の偉人——文・小山展弘

遠州地方においてあまりにも認知度の低い今川了俊

「今川了俊」と聞いても、ゆかりのある磐田市で知っている人は少ない。

磐田市誌は「了俊は文武両道に秀れた士で、武将としてまた歌学者として、史上に大きな足跡を遺したひとである。恐らく彼ほどの人物は前にも後にもこの遠州に現れないと思う」と絶賛しているものの、磐田ではあまり人口に膾炙していない。

了俊が活躍した時代が、メジャーな戦国時代ではなく、室町時代前期であることもその理由の一つかもしれない。

しかしながら、そのことを割り引いても、了俊に深く関係のある磐田市において、あまりにも知られていないことは誠に残念である。むしろ、遠く離れた山口市においての方が有名かもしれない。

御建龍一氏の小説「南北朝合体と応永乱——大内義弘奮戦 大内盛見勝利——」に了俊は何度も九州探題として登場するし、山口市の郷土史家、山本一成氏は、著書「南北朝と大内氏」の中で「戦略家、政



著者 小山展弘氏

治家として、また文化人として抜群の能力を発揮した了俊は、南北朝時代まれな人物であったといえよう」と絶賛している。

南北朝争乱の終結に大きく貢献した大内義弘と今川了俊だが、大内義弘の供養塔が国宝瑠璃光寺五重塔であるのに比べ、今川了俊の供養塔が海蔵寺（袋井市）にひっそりと立つ石塔であることは、後代の為したこととはいえ、遠州地方において了俊への評価が低いことを象徴している。

## 武将としての了俊

今川了俊は、京都または鎌倉、あるいは見付の出生といわれ、少なくとも十七歳頃までは見付にいたのではないかと考えられている。

南北朝の争乱期、九州のみは南朝の勢いが極めて盛んであり、足利幕府の九州探題は関門海峡を渡ることすらできないでいた。このような情勢の中、一三七一年、將軍足利義満並びに管領細川頼之は、九州制圧の切り札として了俊を起用した。了俊は周防の大内氏ほか諸豪族を懐柔し、わずか一年で太宰府の攻略に成功。その後、徐々に南部九州へと支配地域を拡大した了俊は、以後、二十四年にもわたって九州全土を支配する。

了俊の九州攻略は、中央の情勢にも大きな影響を与え、ついに一三九二年、南北朝は統一される。このように、了俊は九州探題として南北朝の統一に大きく貢献したが、その他

にも、倭寇の取締りを強化し、勘合貿易を盛んにすることで幕府財政を潤し、室町幕府の全盛期を支えた。

実に了俊がいなければ金閣寺は建設できなかったかもしれない。

しかしながら、足利義満は、あまりに強大化した了俊の力を恐れ、また大内氏や大友氏、斯波氏の讒言もあり、一三九五年に了俊を九州探題より罷免する。九州の代わりに与えられたのは、所領の遠江のほか駿河半国のみという了俊にとってはあまりにも報いるところ少なかった。

一三九九年、幕政に反感を持っていた大内義弘は、遠江に戻った失意の了俊に討幕計画を持ちかける。了俊はこれに呼応するものの、大内義弘の拳兵（応永の乱）は失敗に終わる。

計画に加担した了俊は、甥の今川泰範の助命嘆願で、かろうじて死罪を免れるものの堀越の海蔵寺に隠居し（了俊が開基の寺）、以後、文学の道に専念する。

## 文化人としての了俊

今川了俊は武将として当代一流であったが、その一方で、勅撰和歌集「風雅和歌集」にも採択されるほどの歌人であり、文化人としても当代最高クラスであり、文武両道の大変な人物であった。

和歌にとどまらず、和漢の書物に広く通じ、徒然草で有名な兼好法師とも交流があった。徒然草は兼好法師の死後に了俊がまとめたものとの説さえ存在する。晩年に著した「難太平記」は、一級の歴史的資料として尊重されている。

## 江戸時代の教科書「今川状」

江戸時代の間で、勘合貿易を用いて行われた貿易。勘合とは照合すること。



▲海蔵寺に祀られている今川了俊の墓碑。

遠江今川家の後継者となった今川仲秋に了俊が与えた書状が通称「今川状」と呼ばれるものである。内容は「今川家はかくあるべきであったか」という家訓を述べたものであるが、これが武士たちの生き方の手本ともなっていく、江戸時代には寺子屋の教科書（往来物）として広く行き渡った。

了俊の遺したものは、江戸時代の教育に大きな影響を与えたのである。

## おわりに

掛川市には報徳者があり、「報徳精神」が郷土独自の教育の柱となっている。山口県萩市においては、吉田松陰や松下村塾、藩政改革時代の村田清風などを題材とした「萩学」を興し、郷土独自の教育を行なって「町おこし」の一つのテーマとしている。

翻って磐田における郷土教育を考える際に、江戸時代の寺子屋のベストセラーである「今川状」や、その著者である、当代一級の人物である今川了俊を、一つの題材として考えてもよいのではないかなと思う。